

乃木坂スクール

2021. 12. 8.

前例を超える・前例を創る～その様々な挑戦

(現場で学ぶ医療福祉倫理)

たいへん障害の重い人たちが拓いてきた 地域での暮らし

西宮市社会福祉協議会

清水 明彦

40年以上に及ぶ西宮の重度障害者の地域 生活展開運動から見渡せば

- 「共生社会の実現」と言われても、何を今さらという感情が沸く。そして「共生」とは共に生きあう暮らしの創造でしかない。それは分けない、区分しない、分断しないさせないことである。そのことをおろそかにして、いくら一体的にというフレーズを連呼しても虚しさだけが残る。
- 医療・福祉の生産性向上に貢献しない者、健康寿命がおわってしまった者。共に歩ませてもらってきた重症心身障害の人たちの、その存在の価値をないがしろにしたままの共生社会の実現はあり得ない。
- 基本的な制度装置の作り替えや、財源構造の抜本的改革をせず、社会保障費の拡大抑制のためにむき出しになってきた反共生的分離分別の装置に、とりあえず「地域共生社会の実現」という見栄えのいいカバーを被せておこうとしているような印象を持つてしまうのだが。

本人中心支援の展開を！

●本人中心の支援 その主体をはずすな！

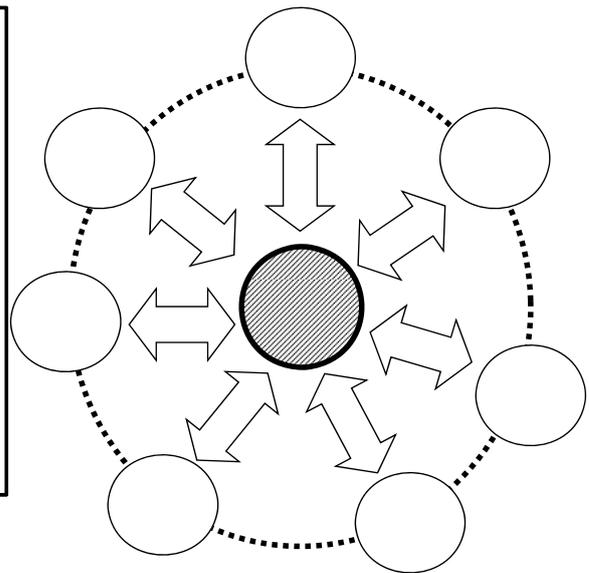
(主体の排除に対する抵抗としての
本人中心の支援)

●本人中心に生み出されてくる展開を！

(一人ひとりを主人公にした
本人の物語が展開)

●地域の中で本人中心で支援を！

(その人の存在が持ついくつもの
社会的役割を共に果たしていく)



● 本人(市民)

<障害当事者>

○ 支援者・市民

<専門職>



横から見ると、立ちあがっていくベクトルたち 〔エンパワーメント連鎖〕

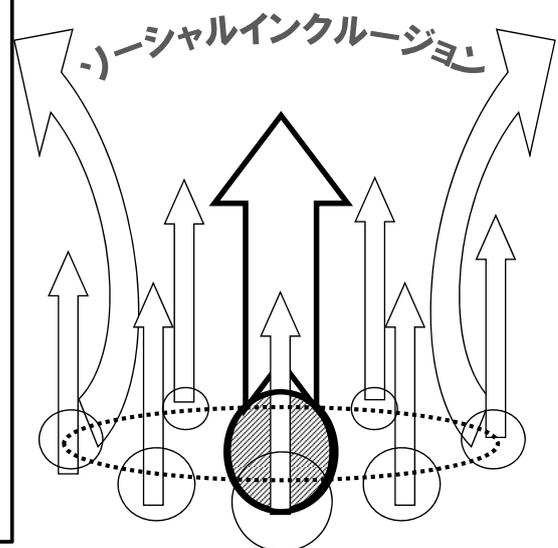
市民みんなのエンパワメント(ベクトル)

まわりの人たち(親・家族・地域の人)
のエンパワメント(ベクトル)

支援者のエンパワメント(ベクトル)

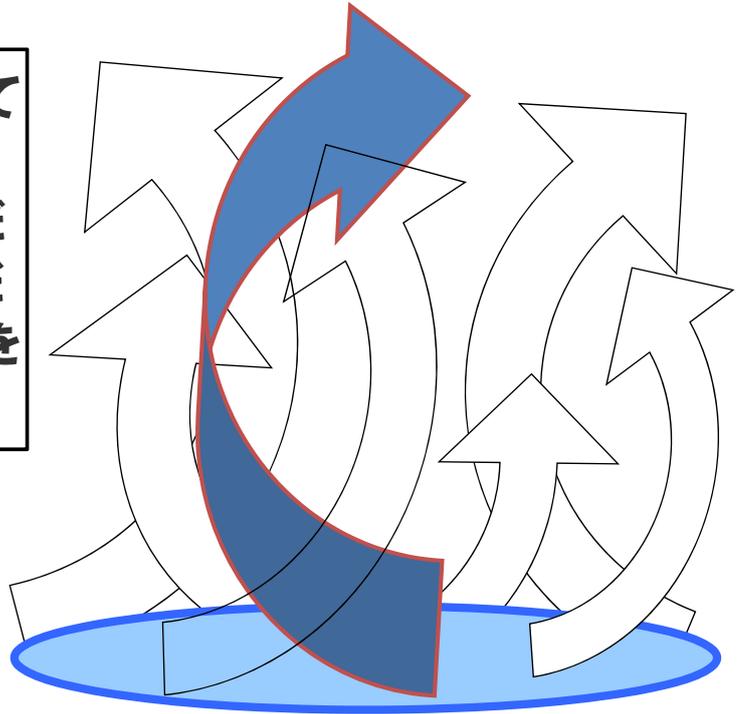
本人のエンパワメント(ベクトル)

本人中心で(本人の希望に基づいて)
支援展開することによるエンパワメント
連鎖(共生社会実現への希望)

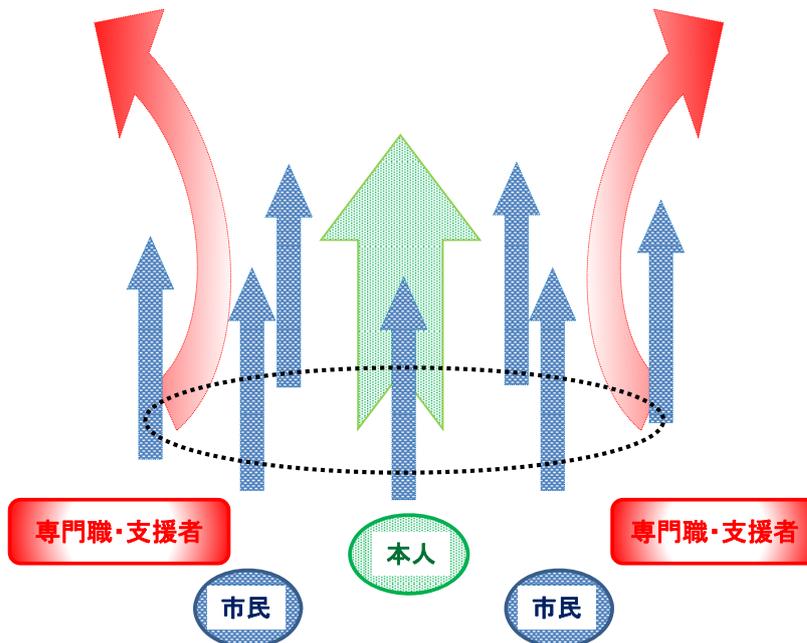


共にこころふるわせながら、一人ひとりがその人らしく
生きていく日常こそが価値であり希望！
新たな価値観による持続可能な生産的市民社会の形成

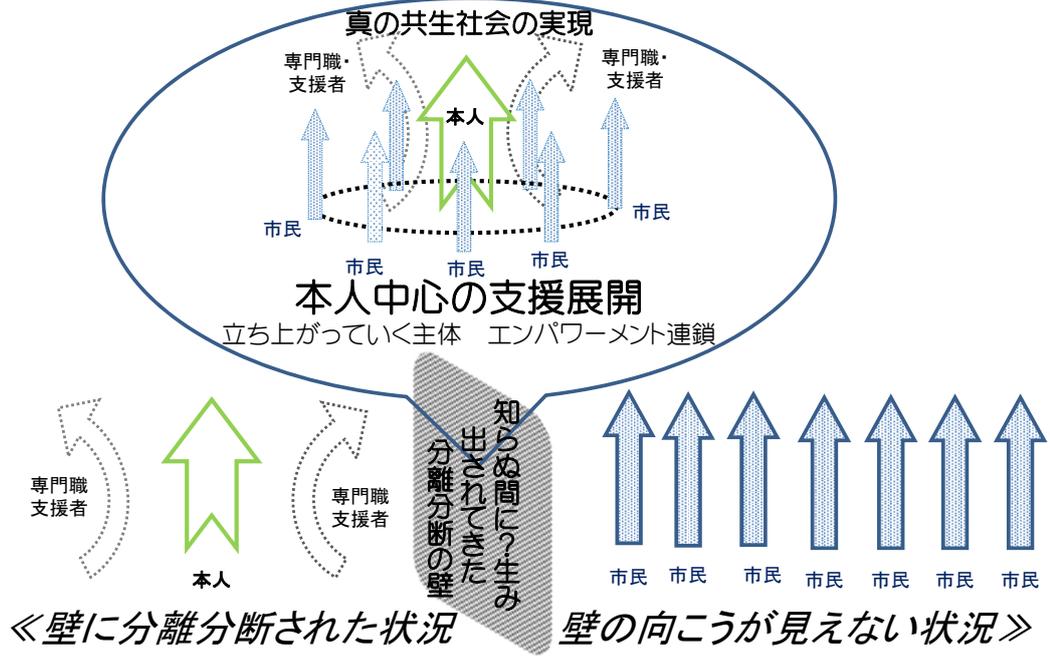
揺れる主体に基づいて
共に立ち上がっていく
こと（一緒に喜んだり、
悲しんだり、悩んだりして、
一緒に希望を持ってやっ
ていくこと）



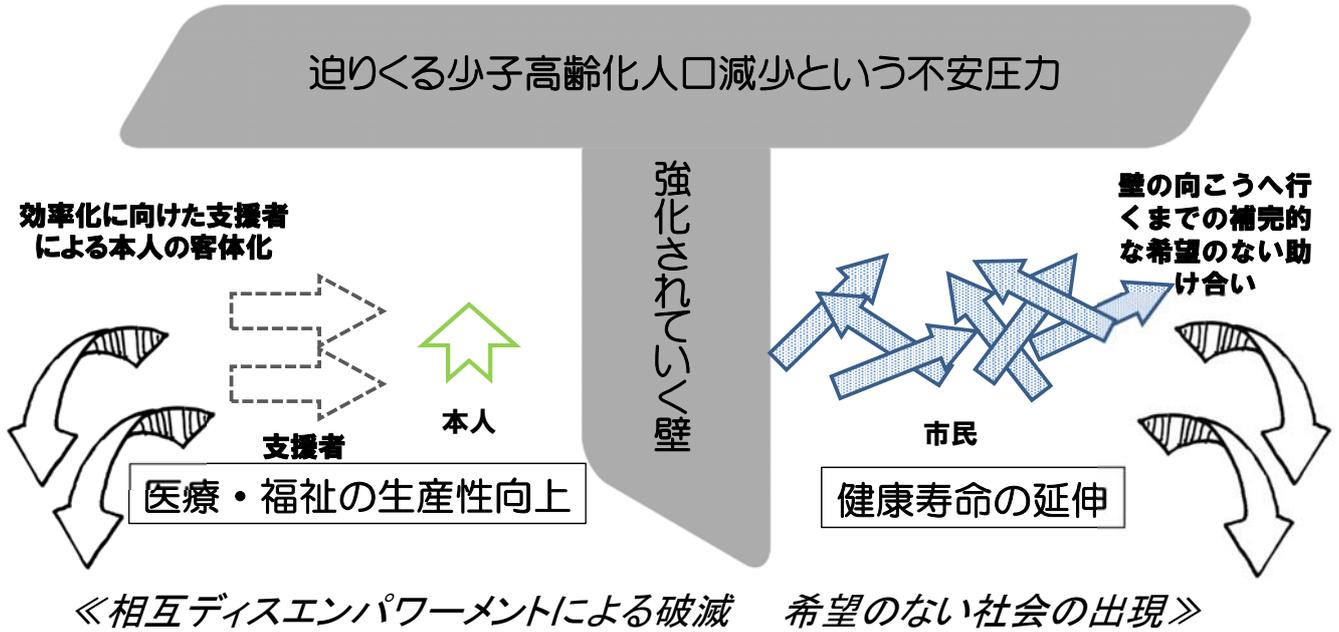
本人、市民、支援者相互エンパワーメント
みんなで創り出す共生



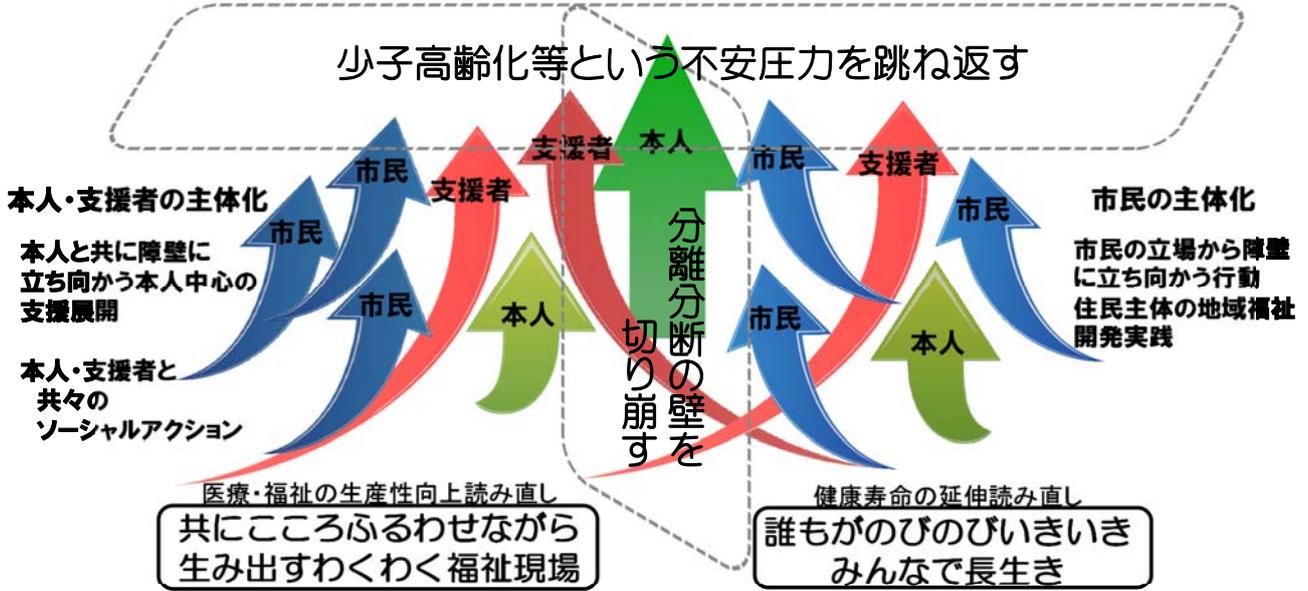
【本人（当事者）、支援者、市民の相互エンパワーメントによる共生！】



【確実に作り出されてきている共生に逆行する流れ！】

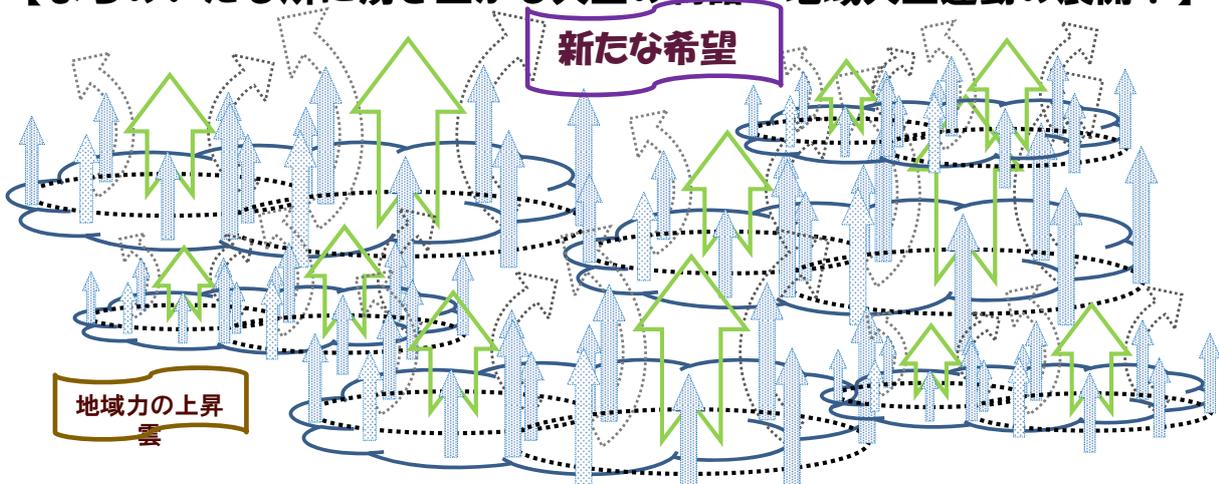


【共生とは継続的相互主体化実践により生み出される！】



《本人を真ん中に両側からしか壁は崩せない 生きていく力を重ね合わせていく地域共生運動展開》

【まちのいたる所に湧き上がる共生の物語 地域共生運動の展開！】



一人ひとりが地域で分けられることなく、一人ひとりのその人らしい物語を生きる、
一人ひとりが地域で相互に役割を持って、一人ひとりが立ち上がっていく真の共生のまちづくり
《新自由主義的価値観を打ち破り近代合理すらも超えて真の共生のまちづくり展開を(と、楽観的に夢みる)》
共生のまちづくりまんだら

地域自立生活支援展開とは、

今ここでくらすご本人のこれまで生きてこられた価値的物語の展開を心の底からの敬意を持って受け止め、そして自分自身も今ここで生きるものとしてその物語に参加させてもらうこと。

共に心震わせながら…。

「共生の営みがなければ思いの表出はできない」

(DPI日本会議副議長 尾上浩二さん)

[思いの表出がなければ共生の営みは生み出せない]

重症心身障害の人の思いの表出 主体の立ち上がりこそがそこに共生の営みを湧き起こしていく

＜共生の営みの源としての重症心身障害の人の存在＞

のりこさんと出会って

同じこのまちで暮らす同世代の
同じ20年間を生きてきた人との出会い。

《福祉の専門職として保護のもとにある重症
心身障害者と出会ったのではない。》

なぜあんなにも心が震えたのか！

あまりにも大きな違い！ そのことによる衝撃。

自分の生きてきた20年への逆照射。

— 障害者ソーシャルワーク実践からの報告 —

2009年9月24日 横須賀氏のインタビューにこたえて 清水明彦

僕らの世代だけかもしれないけれども、確かに革命が起こるんやと、全ての矛盾が解消されるんやというふうに、正味ですね。まだ子どもですから、早いこと大学行って連帯して革命おこさなあかんのやと思うてましたんで。大学に行ったら無茶苦茶になってもうて、簡単に言えばそういう……。その中で私自身は特に志があった訳でも、問題意識があった訳でもないけれども、大学へ行っても、もう一つ、こう、何ていうんですかね、中央の闘争に来るか来ないとかですね、そういう話とか、しょうもないセクト化した状況の中で、なんかすぐ内ゲバで流血騒ぎがあるとかですね、あんまり論議しても意味がないとかですね、そういう状態の中で、結局は、その、あの何ていうんですかね、そんなにすごい、こう、なんか、問題意識があって、じゃないんやけど、大学行って「いまから東京のデモに行きましょう」といわれても行く気にはなれないから。そうするとやっぱり自分の身の回り、あるいは自分の具体的な関わりの中で、地元で活動していくというんですかね。いわゆる地域闘争主義というような当時・・・やはり身の回りの畑を耕すことからはじめなきゃいかんというみたいなね、そういう中央でどうこうじゃないやろうというようなことで。

で、まあ、いろんな経過の中で、本当にたまたまですね、本当にたまたま、重症心身障害の西宮のいわゆる未就学在宅の方、というか、20年間家から一歩も出たことがないと、親子で家の中に閉じこもりっきりになっている人たちの家庭訪問活動っていうものに加わる訳ですね。それは別にたいして、なんていうか、たまたまそういうことをやっていたサークルにかわいらしい子がおったりして、「まあ、ええか」みたいな、あと飲みに行くの楽しいやろうなあ（笑）、まあしょうもないことでやとったというか、まあ、そやけどまあまあ、そういう、大学にいてもしゃあないから、西宮に足を運んで活動していた。そんな中で僕自身は、やっぱり決定的な、全く同世代の未就学在宅のご本人との出会いをすることになるんですね。何回も何回も家庭訪問を続けても、いつも追い返される中で、本当に、当時重症心身障害の方の、なんていうか、サービスとか、社会的な支援、そういう支援の仕組みや制度っていうのは全くないですから、まあ大変なつらい思いをして、医療機関からも見放されて。で、この子を守れるのは私でしかないという親の思い、そうさせたという歴史があって、まさにそうやったと思うんで。で、もう大変なそれこそ四六時中ですね、もう食事からおトイレから、夜中の2時～3時に洗濯が終わるまでかかるような、そういった排便ひとつにしても、それこそ朝から一日がかりで、本当に大変な経過を毎日のように続けてられるという。ご本人も日々生きていこうと。そこで、何ていうのかな、いつの間にか20年が経過していたという。

たまたま私がええ時に行っておうちに入れてもらえた、そしてご本人にお会いできた時に、まあそれまであんまりですね、障害者問題を一生懸命やろうとか、そんな気はのっけからないですし、しかしそのご本人と会う時に、やっぱりこう非常に、なんていうか、単純に言えば感動したというんか、感動したというようなレベルのことではないですが「とてもこの人はかわいそうや」とか、あるいは「この人がこういう形で人権侵害されている。これは社会問題や」とかですね、そういうふう思うたんじゃないんですね。あるいは私がなんかしてあげなあかんとか、そんなふう思ったでは全然ないんですね。全く違うんです。むしろその人這うて出て来はって、ずっとよよだれが垂れてるんを親御さんがすくいあげはったんですよね、素手で。僕は今でも明確に思い出せるんですよね、そのシーンを。夕方やったんですけどね、そのシーンがすごいなと思った訳ですね。すごいなというのは、どう言うたらいいんですかね、きれいだなと思ったんですね。そのご本人もここで20年間ここでこうして生きてこられたということについて、すごいなと思ったんですよね。それは明らかな他者やったんですよね。その…何ていうか、自分の20年とその人の20年というのは明らかに違う。で、自分の20年を照らしてみた時、この部屋ですっと過ごした20年というものの対比の中で、どっちが価値があるとかいうよりも、むしろしょうもない自分がくだらん生き方をしてきて、その明らかな違いっていうんですかね。

しかしそこに同世代の、いま存在している人、それを取り巻く、例えば親御さんとか、その人が生み出してきたひとつの世界との違いと、違うが故のすさまじい魅力っていうんですかね。その、何ていうか、価値観が変わって、目からウロコっていうか目から目玉っていうか・・・、やっぱりそこが一つの大きな転機になる訳ですよ。まあその何ていうか、人が人と関わることとか、あるいは人が生きるということとか、生きて存在するという事とか、そうしたことの意味を、極めて感覚的だけれども受けとめたような。おそらくそういうことがなければ、自分はそのまま生きていたであろう。何ていうか、飛躍的な世界の・・・転換やったんですけども。結果的にその人の家にずっと行き続けて、その後、就学運動とか拠点づくりの運動になって。運動しようというよりも、ただ単純にその人とその人のまわりが創りだすいろんな出来事、その事が非常に、何ていうか、そっからよう離れんっていうか、まあいうたら、その物語の中に居続けることが、やっぱりこう、自分の中で必要とする訳ですよ。

障害者ソーシャルワーク実践からの報告

科学研究費補助金「障害者ソーシャルワークの理論と実践方法の再構築に向けた障害領域別の比較研究」報告書

発行日 2011年2月14日

発行責任者 横須賀俊司

県立広島大学保健福祉学部

より抜粋

【青葉園へ向かっていくエネルギー】

- 自己存在そのものへの衝撃
- 相互の世界を交わし合っていきたいという衝動
- その存在から立ち起こる価値的物語
- そこに自己存在をかけて参画していきたいという強い欲求

そこから生まれてきた西宮市のたいへん障害の重い市民の活動拠点「青葉園」

全くの独自事業として制度にとらわれず西宮社協により開発的に運営

本人と支援者が共に創り出していく青葉園での「活動」
地域での「活動」の中で生まれてくる1人ひとりの「物語」

青葉園で内発的に必要となってきた一人ひとりの活動と支援の「個人総合計画」(個別支援計画)

地域で生きていかんがための青葉園の本人の地域自立生活(一人暮らし)の始まりとその「支援の輪」づくり

青葉園基本理念 1982. 12. 23

1. 青葉園は、重度障害者の生活拠点的場であり、またその場作りをめざし続ける。
2. 生活拠点的場とは、重度障害者一人ひとりが豊かに自己を実現し、いきいきとくらししていく為の土台となる場であり集団である。
3. 生活拠点的場であるためには
 - ①まず、通所者自身の健康管理・増進がはかられていなければならない。
 - ②園内の様々なきめこまかなとりくみによって、個性や可能性を見出し、のびし、十分に自己を実現していなければならない。
 - ③園が地域に開かれており、多くの人々とかかわりがもて、様々な機会が用意されるという、自由と豊かさがなければならない。

4. 青葉園のとりくみは、生産性・効率や、単なる身辺自立のみを追求する活動とは根本的に異なり、通所者や職員・親など園にかかわる全ての人たちが一体となって共に考え、悩み、理解し合い、そして主体的に生き会うくらしを創造していくことを基本目標にしている。

5. 青葉園は、重度障害者の生活拠点を作りあげていくことを通し、ひいては一般の人々すべての生活拠点作りの核となることをめざしている。いわば青葉園は、一般の人にとっても、一人ひとりが人間のあるべき姿を問い続け、失いかけている生活拠点を取り戻し、より豊かなくらしを作り上げていくための重要な公共的・社会的資源である。

6. 自己を十分に実現できる場をもち、いきいきと暮らしていくこと、またそれをめざし続けることは、人間として当然の姿であり願いである。それはどんなに障害が重くとも追求され続けられるべきであり、基本的人権のひとつである。

地域の中から重い障害をもつ人の「活動」の展開

● 地域との「活動」の中から生み出す活動の可能性

独自(青葉のつどい)方式、芸術文化型、市民運動型、商店型、NPO型、サークル型、等々

● 本人の存在の社会的価値化＝はたらき 本人のねうちをちゃんと位置づける

一人ひとりの存在の価値に基づく支援展開

● 内発的に必要となってきた青葉園の『個人総合計画』

● 『活動』と『支援の輪』の『本人の計画』にもとづく支援の仕組みの再構築

【青葉園の個人総合計画づくり】

一人ひとりの存在の価値の多様性と同等性のなかで、一人ひとりの活動と支援の計画をご本人一人ひとりに頼って作っていくしかないという創り出されたのが青葉園の個人総合計画。(現在の制度上の位置付けは生活介護事業所の個別支援計画)

ご本人と一緒に活動することでいろんな物語が動く、支援者の心が動いたことを日記のように書いておく。それを証拠にご本人はこういうふう生きようと思えていると思えたことを書面化。

そして、その実現のための活動と支援を明確にして具体的な支援プランを作成。それを常にご本人とみんなで検証していく。

活動の中から次の本人の計画を作っていく。ご本人との物語の先を一緒に作っていく。

- 1人ひとりの「活動」とは、「本人の計画」(個人総合計画)の実行であることはもとより、その「活動」の中から生み出されてくる1人ひとりを主人公にした物語の中で次の希望が見出されていく、ということから「本人の計画」づくりでもある。

【「活動」の中で立ち上がってくる主体

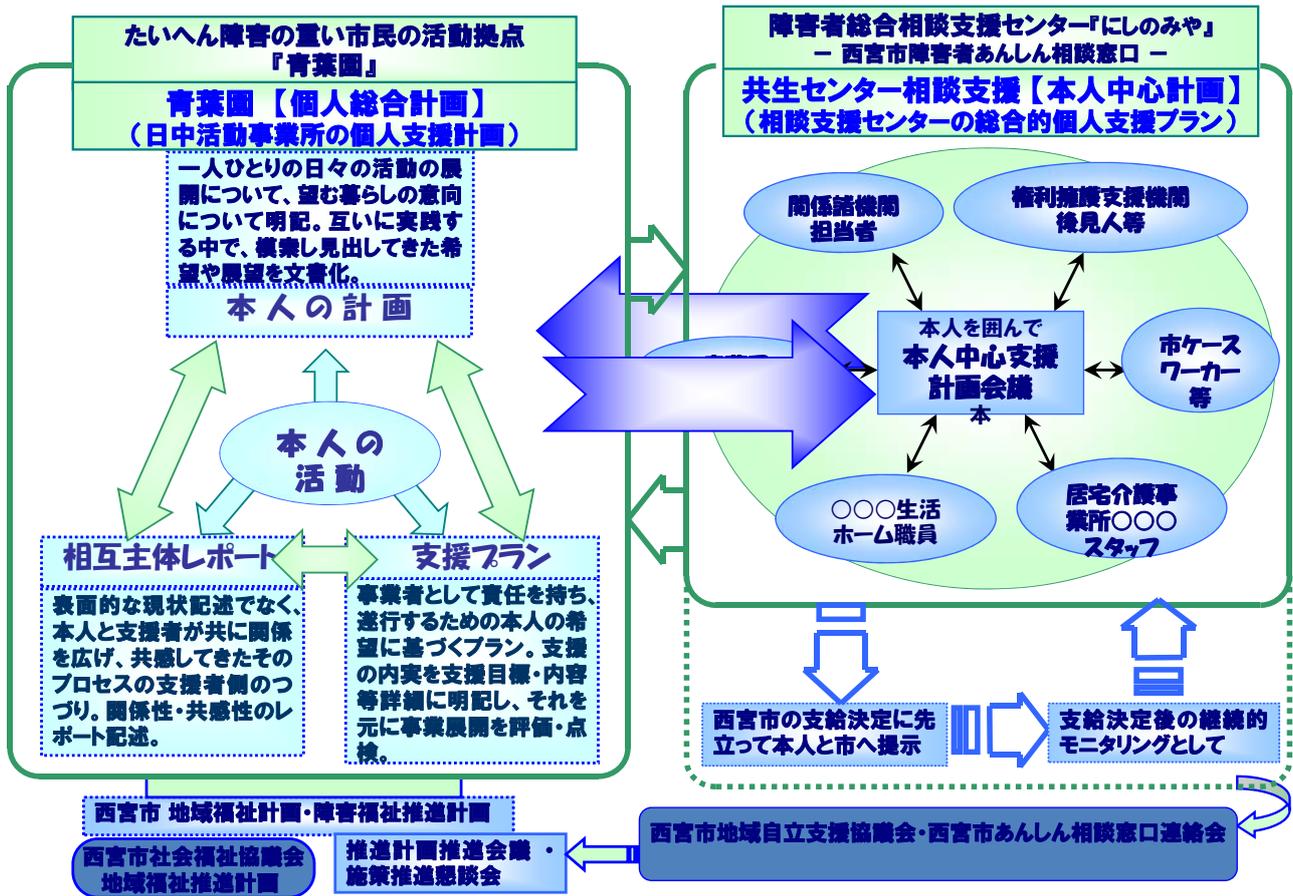
本人の価値的物語が展開】

ちえみさんが生きてきたことが 西宮に生み出したもの

西宮中に広がっていく重症心身障害者の
地域生活展開

ちえみさんが生きていく、その思いを
立ち上がらせていくことこそが、そこに共生
の営みを立ち起こしていく。

本人中心支援に向けて【活動】と【支援の輪】の《本人の計画》～青葉園・西宮市の場合～



【西宮市における本人中心支援計画づくり】

西宮市の障害福祉サービスを利用するすべての人に、「本人中心支援計画」(「サービス利用計画」ではなくて)作りを行っている。

家族や関係事業者などに、例えば、「お母さんは、ご本人(子供さん)はどこで誰とどんなことがしたいと願っていると思いますか。どんな希望を持って生きていってほしいですか。」とアセスメントし思いを出し合う。

家族、事業者、関係者みんなで集まって本人中心支援計画会議を開く。必ずご本人を囲んで、そこに居られるご本人の希望が立ち現れてくるような会議。

それを踏まえて「本人中心支援計画」のフォーマットに落す。ご本人のだれとどこでどんなことがしたいのか、という大きな希望、目標をまず記載することによる本人中心の支援の計画。

- 本人を囲んで関係者が一堂に会し、本人主催の本人中心支援計画会議を開催し、本人の希望に基づく本人中心支援計画フォーマットにより計画を作成する西宮市独自方式での計画相談展開、本人中心支援計画づくりが市内全域で進められている

【相互エンパワーメントをもたらす支援の局面を変える

本人中心支援の全市全般化】

本人が生活主体者として生きていく事を支える「支援の輪」が常に本人中心に稼動するよう相談支援展開する

障害者生活相談・支援センター「のまネット西宮」

措置から利用契約の移行の中で意思表示が容易ではない地域自立生活(一人暮らし)者が自己の意思に基づき、堂々と暮らしていける方策としてどうしても必要となってきた権利擁護支援機能の実体化

権利擁護支援 NPO「PASネット」発足

市民みんなの権利擁護支援システム構築に向けて

「西宮市高齢者・障害者権利擁護支援センター」

市内相談支援のネットワークあんしん相談窓口の相談支援専門員を結集 基幹型相談支援センター

障害者総合相談支援センター「にしのみや」

本人の希望に基づく計画相談として市独自の

「本人中心支援計画」づくり

共生型地域交流拠点そして、地域生活支援拠点の(あくまでも)面的整備の発信起点として

地域共生館「ふれぼの」

〔西宮市地域自立支援協議会〕

- 支援費制度を控えて、市内の障害者支援団体や事業者、当事者団体や親の会等々が、情報交換と協働を目指して自主的に生まれたネットワーク(「西宮のしょうがい福祉をすすめるネットワーク」)が、そのまま地域自立支援協議会に移行。
- 行政と共に双方向共同構築型の協議を展開。協議の成果は政策に反映させる。
- 国の制度動向をとらえ、西宮的解釈を協議、西宮的再構造化を行い実体実践へ。

**社会福祉協議会や地域自立支援協議会での協議に基づいて、
実践側としての捉えなおし読み直しとしての建設的転換**

生活介護事業所「青葉園」⇒地域生活拠点「青葉園」

サービス利用計画⇒本人中心支援計画

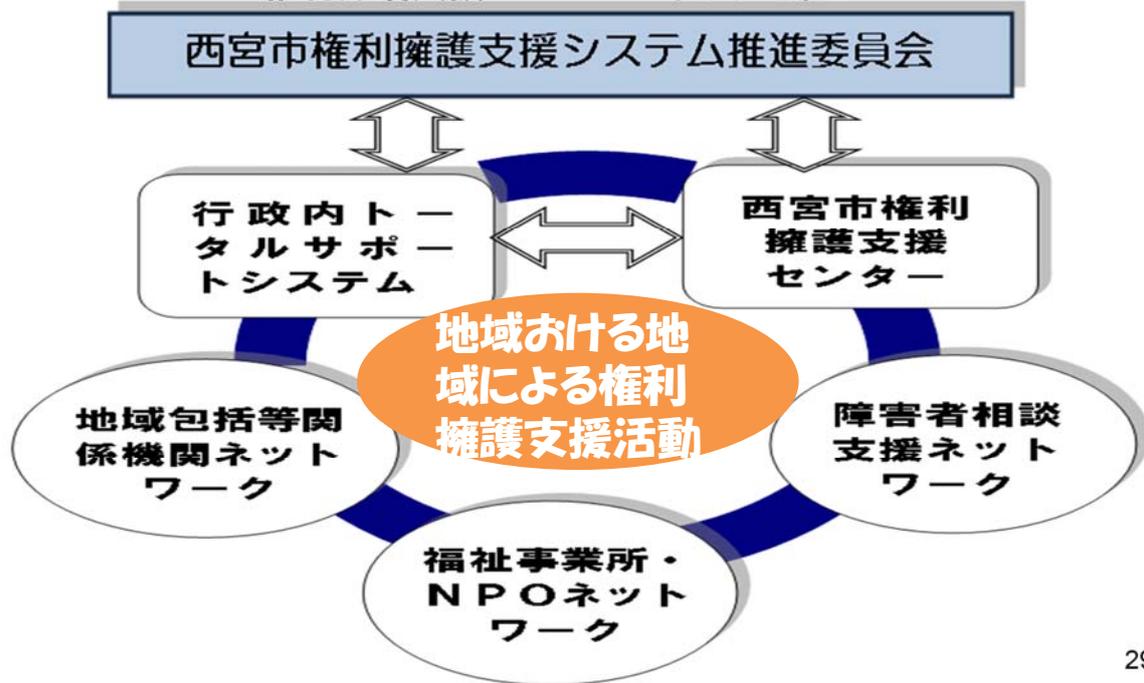
成年後見センター⇒権利擁護支援センター

成年後見制度利用促進計画⇒権利擁護支援推進計画(地域福祉計画)

[全市的な権利擁護支援の仕組みイメージ図]

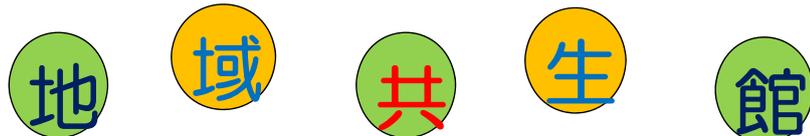
西宮市における権利擁護支援は、たんなる成年後見制度の適応や意思代行としての後見人の選任の斡旋という機能ではない。
一人ひとりの存在の価値に立脚した、地域で当たり前に生きたいということへの人権侵害に対する権利擁護支援機能の確立を目指している。

権利擁護支援はすべての住民の課題



29

共生のまちづくりの発信起点として



西宮市社会福祉協議会
第8次地域福祉推進計画
(2015～2020)

地域福祉目標

みんなで創り出す

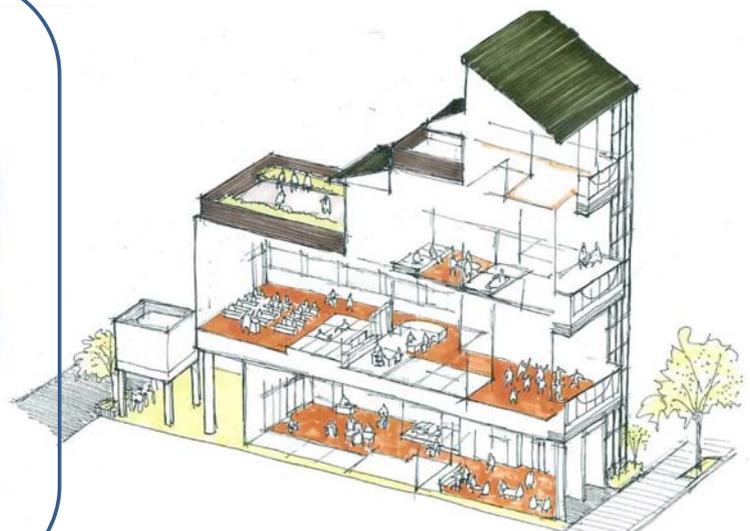
共生の『まちづくり』

～あなたの“居る”まちを

あなたが“生きる”まちに～

共生のまちづくり実践拠点

地域共生館

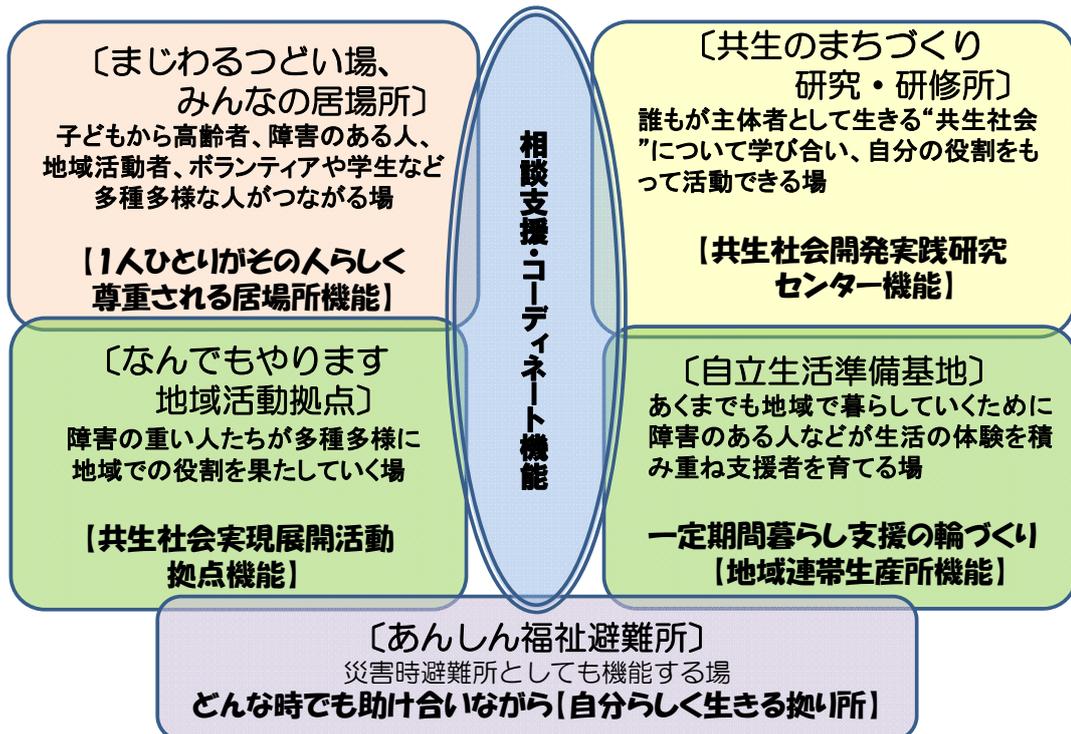


地域共生館「ふれぼの」

- 西宮市社会福祉協議会では、地域福祉目標『みんなで創り出す「共生のまちづくり」』に向けた展開を目指し、地域共生館「ふれぼの」を2016年4月に開館しました。
- 西宮社協には、1981年より重い障害がある人が地域で自分らしい暮らしをしていくための活動拠点「青葉園」での展開経過があります。“重い障害の本人は地域で暮らす主体者であり、地域社会を変革していく主体者である”という実感のもと、「青葉園」の活動は園内にとどまることなく、地域の公民館での住民との地域交流活動など、地域の一員としての活動を30数年間展開してきました。
- その「青葉園」から「ふれぼの」に、通所者本人20人が乗り込み(移籍し)、これまでの「青葉園」での実践を踏まえ、さらにダイナミックに地域展開していくことを目指して活動をスタートさせています。

＜地域共生館「ふれぼの」機能図＞

それぞれの機能が相互に連動し相互エンパワメント



西宮のいたる所に多様な主体との連携による共生の居場所拠点(地域共生館)を！

《(重い障害を持つ)本人の存在の力で 西宮を真の共生のまちに!》

本人の存在の力による本人一人ひとりの本人主体地域活動展開から、本人の存在の力に導かれた西宮の市民みんなの共生のまちづくり

地域の生活主体者として地域で包摂された
地域生活主体者原則

地域で役割を持ち社会の価値観を変革する
地域変革主体者原則

真の共生社会の実現は、本人、支援者、市民 と三者の相互エンパワメントによる

【支援の合理化、効率化ではなくて、生きているもの同志の心の揺らぎのままに、こころ振るえる価値的物語を糧に】

本人(当事者)、支援者(専門職)に市民(地域住民)が加わった三者関係のもとで、幾重にも重なりあう主体化によって地域共生社会が形成される。

「地域共生社会実現」に向けて包括的な支援体制整備^{そして}重層的支援体制整備事業が提起されている

- そもそも青葉園成立前史における在宅者の家庭訪問活動等は、アウトリーチで伴走型でしかなく、それは断らない相談支援などではなく、断られても止めない相談支援であった。そして相談支援は支援であり、それはそのまま一緒に外へ出ようという社会参加支援に発展していく。そしてその社会参加支援が40年以上に及んで拡大しながら続くこととなるのである。さらにその参加は、当初は社会との軋轢を生みそれでもなんとか居場所を確保しようとする戦いとなるが、それはやがて地域住民と共々の展開となり、地域づくりとなっていく。その経過の中でいくつもの誰もが暮らしやすくなる仕組みが生みだされてきたのである。実はそのことが地域づくりの本質なのであろう。相談支援と参加支援、地域づくりは本来このようなものではないのか。
- 今提起されている「地域共生社会の実現」は、一つひとつを区分概念化して役割分担をしてしまうことによって、すべての共生へのダイナミズムを失い形骸化しているように思ってしまうのである。

ひとりひとり、今ここで自分らしく自分の物語を生きていく主体者！

ひとりひとり、その存在の価値と固有の役割を持ちここに居る！

ひとりひとり、その本来もつ自分らしく生きていく力を相互に重ね合っ
て、共に輝かせていく共生へ！